荒れ地を開いた山畑に
ムギは取り入れを待つ
「へえー？これがムギか。」
「ぼく、はじめて見たよ。」

鍬を握って土の温みを感じ
鎌を持って雑草のたくましさを知る。

「口のついた生き物の世話はな、えらいぞ。一日でもさぼったらあかんぞ。」
だが、子供たちは、何の屈託もない。

教師の心配も無駄。
「先生、ウサギの目ってほんとに赤いね。」
「産みたての卵ってあったかいね。」

昭和52年６月１日
編集発行／岡崎市教育委員会

（土に親しむ―奥殿小）

—教育随想—

六然

神谷葵水

いま私の家の床の間には、恩師荻野謙堂先生の書が掛かっている。

超然として天に任せ
靉然として人に接し
悠然として道を楽しみ
発然として自ら粛しみ
毅然として節を持し
泰然として難に処す

と言う語句で、箱書きには「六然訓」と題されている。

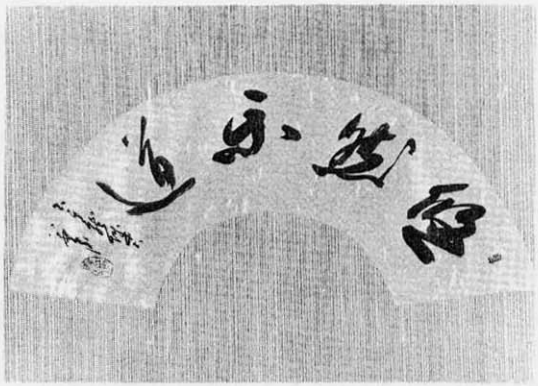
これは一昨年の秋、わざわざ私のために書いて下さったもので八十四歳のお作である。その重厚森厳、沈着痛快な風格にはおのずから頭がさがる。しかも、どの一句をとってみても身にしみて深く反省されることばかり、貴重な箴言として宝愛している。

この「六然訓」の出典については、先生もよく分らないと申された。これとほとんど同じ「六然訓」を故増田義一氏（『実業の日本』創設）も座右の銘としてよく書かれたが、やはり出典は不明らしく、単に古語と称しておられたと聞く。

私がはじめて「六然」の語に接したのは、四十年前、『一休禅師論語』の風鈴警策の章に、

自ら処すること超然
人に処すること靄然
事無ければ澄然
事有れば嶄然
得意には淡然
失意には泰然

と引かれている勝海舟の語であった。当時よほどこの語に感銘したらしく、強く引いたサイドラインが、いまもなお鮮明に残っている。



ともあれこの「六然訓」は、人々の共感をよぶらしい。F先生も校長の時代、先輩から聞いた名言だがと申され、扁額にぜひ書いてほしいと懇請され、ご退職の後も人に贈るとて、色紙への揮毫を依頼されたことがある。

また、この「六然訓」にあやかった会もあるようで、私も二つほどを知っている。一つは安城市立西中学校、一つは名古屋の藤井丙午事務所のそれである。安城西中では、やはり荻野先生の書が校長室に掲げられ、同校に籍をおく先生方で六然会が結成されている。藤井丙午事務所では、丙午氏の好んで書かれる「六然」にちなみ、その後援会を六然会と称しておられる。

藤井氏揮毫の「六然」は、荻野先生のそれと違って勝海舟の語であると言われるが、前記のそれと比べると、字句や語序に多少の異同がみられる。一体原文はどうなのか。手もとの『海舟座談』や『氷川清話』などにはもちろん見あたらない。いずれ全集にでもあたってたしかめたいと思っている。

ちなみに荻野先生は、小学校五・六年時代の担任で、私が書の道に志すようになったそもそもの機縁は、先生のご指導によるものであった。

（愛教大教授）

●聞かぬは末代の恥

中根　豊美

六月のある日、路上である母親との対話、今思い出しても冷汗三斗のおもい。

母「アーラ先生、いつも子どもがお世話になりまして。」

（ハテ？誰のお母さんだっけ。とにかくあいさつを…。）

私「こんにちは、どういたしまして。行き届かないことばかりで。」

母「このごろ、どうでしょうか。うちの子は…。」

（ホラ、きた。名前を聞こうか。まあいい。もうすこしすれば、わかるだろう。母親をがっかりさせては、悪いし…）

私「ええ、学校にも友だちにも、よく馴れて毎日、とても元気ですよ。」

（これなら、誰にも通じる。でも悪いな。ド忘れしてしまって、早く思い出さなければ、…とあせることしきり…）

母「あの子、誰と遊んでいますか？。」

（ますます困った。話がだんだん深入りしてくるな。もう思い出さないと、とんでもないことをいってしまいそうだ。なおみちゃんに似ているな。そうだ！）

私「小久保綾子さんと遊んでいますよ。」

「アユかね、そりゃ、わしらの子どもの時分には、川がまっ黒になるほどおったもんだ。明治の終わりのころのことだがねえ。当時は、水遊びしとって、手でつかむことができたほどだが、誰もそんなに有難がらんかったもんだ。」

生平町の小林さんが私に話してくれた乙川・男川のアユの話である。昭和の初めまで、毎年天然アユが三河湾から矢作川・菅生川をさかのぼってきたそうだ。

明治・大正の頃までは、一部好事家の嗜好品で、地元の人にはあまり関心を持たれなかったアユも、昭和にはいると商品としてもてはやされるようになったとか。河合地区でも「専用漁業組合」というものを設けて売ったそうである。河合地区のアユは、川の流れと気候が成長の条件にあっていたのか、特に形がすぐれているということで、東京あたりで有名であったそうで、とてもよく売れたという。ただのまるもうけであった。

ところが、日清紡績が操業を開始すると、その廃液のために、天然アユがのぼってこなくなった。これは一大事と、地元が工場とかけ合った結果、工場が補償として、琵琶湖の稚アユを乙川に人工放流することになり、今日に至っているという。

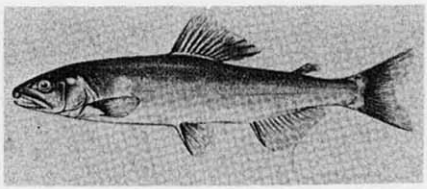
アユは、アユ科の魚で、アイとも言う。アユは、ただ一種で、朝鮮、台湾、中国特有の魚である。産卵期は十～十一月で、この頃の成魚の体色は著しく黒褐色を帯びる。いわゆるサビアユである。卵は川の中、下流に産みつけられ、二～三週間で孵化する。幼魚は海に下って越冬し、翌春、二～三月、河口に集まる。これがシラスアユである。

やがて、川をのぼり始めるころには体長五～六センチの若アユとなり、一か月三センチといわれるほどのはやさで、成長しながら上流へ移動する。このころの若アユは動物性の食物をとっているが、やがて成魚になると食性が変化し、岩に付着する藻類しか食べなくなる。夏がすぎ、水温が下がり始めると川を下り、産卵して一生を終わるのである。アユを年魚と書くのは、このためである。

現在では、各地ともほとんどが放流であるが、矢作川などは、今でもわずかに天然アユがのぼってくる。ところが、乙川水系には天然アユは全くみられない。

再び小林さんの話。

「むかしは、ヤナをつくると一晩でアユやウナギが十貫も二十貫もとれたがねえ。川が汚れてしまってねえ、工場の排水もだが、県でする護岸工事や砂防工事も、アユにとっては致命傷だわ。年中どっかでやっとるで、川底の石もヘドロで埋ってしまったよ……。」



この河合地区も護岸工事で川岸がすっかりコンクリートで改修されてしまったためか、よどみがなくなり、水草や魚のかくれ家がなくなった。そのため、アユだけでなく、姿を消してしまった魚もかなりいるようである。

自然と人間の生活どの調和、天然アユやウナギがふたたび三河湾からのぼってくるような、本当にきれいな川が帰ってくるのはいつのことだろうか。

（羽根小　永井　貞）

●「パイナップル食べたげようか。」

畔柳　繁男

子どもたちと話しているとたいへん楽しいが、ときどき、喋り方に耳障りなところがあって苦になる。

給食の時間。パイナップルの輪切りが出た。一年生の子どもたちは、ほしいものがあると、担任のところまで平気で押しかけてくる。

「せんせい、パイナップル食べたげようか。」

こちらが頼んでもいないのに「……してあげようか。」といった言い回しをする。

「せんせいはな、だれにも食べてくれなんていっていないぞ。」

「へえ、せんせいのけち。」

といい捨てて帰っていく。

つめが長いので注意すれば、「あしたは切ってきてあげるね。」と、何くわぬ顔で言い返す。

いいかげん頭にきてどなり返したくなるが、子どもたちにとっては、これが、当り前な言い方なのであろう。

こうした、自分の利益になることまでひとに恩を着せて言う言い回し方は、この頃の子どもの特徴の一つで、小さいときから、親にして貰うことが多く、自分の責任において事に当たるということの少ない一面の現われだろうか。（根石小）

母「えっ、女の子とですか。」

（ああ、絶望！男の子だった。はじめにすぐ聞けばよかった。ひどい話）

（緑丘小）

大きな期待を担った
百余名のフレッシュマンが
教壇へ立ってより二箇月。
わずかな期間であるが
その若い目は何をとらえ
そのしなやかな心は何を感じたか。
吹き込まれた新風で
停滞していた空気は一掃され
注入された新しい血が
今、めぐりはじめた。

よろこぶ

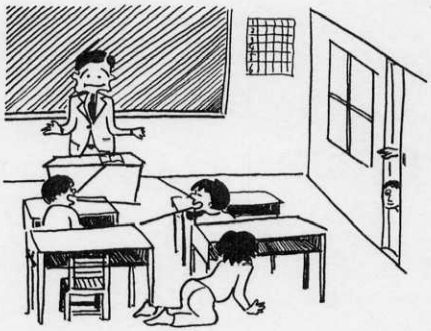
―― いちばんうれしいこと ――

・子どもに「先生と呼ばれたこと。」
・担任をまかせてもらえて、私を一人前の教師として認めてくれたこと。
・授業中には逆らってばかりいる生徒が、掃除の時には一番に手伝ってくれたこと。
・叱った子どもが、しばらくして「先生……」と話しかけてきたこと。
・叱った子どもが泣いてくれたこと。
・学級通信が父兄に好評だったこと。
・生徒が机に花をかざってくれたこと。
・「子どもが先生に似てきた。」と父兄から言われたこと。
・子どもが「先生の組になってよかったな。」と言ってくれたこと。
・同年輩の同僚がいて、何でも話し合えること。
・たまった仕事を先輩が手伝ってかたづけてくれたこと。
・初日からアダナがついて、知らない子どもまで話しかけてくれたこと。
・子どもが花をたくさん持って来てくれたこと。
・ビクビクで弾いたオルガンを子どもが「先生、あんがいうまいね。」と言ってくれたこと。
・黙っていた子が初めて返事をしたらみんなが手を叩いてくれたこと。

なやむ

―― いちばん困ること ――

・授業中、子どもが遊びに行ってしまった。
・勤務一週間めにして声をつぶしてしまい話したくても話せない辛さ。
・いくら半人前でも、仕事が一人前に与えられ、消化しきれない状態。
・分きざみで行動し、そして、いつもすべてを見渡していなければならない緊張感。
・教材研究が不十分で、授業中質問されても答えられず立往生。
・どのようにして教室内を静かにさせるか。すぐ立つ子に手をやく。
・自信もないまま責任のある担任となり、すべてが手さぐりの状態である。
・仕事の意味など納得できないまま、仕事に追いかけられる。
・子どもと接してやる時間が、もっと欲しい。
・いくら注意しても静かにしてくれない。大声でだまらせるのはまずいと思うが。
・教材研究の時間がなかなかとれない。
・聞こうと思っても、みんな忙しいのでその機会があまりない。
・子どもの程度がよくわからない。だから、どのように説明したらわかってくれるのか見当がつかない。
・家庭訪問などで、何からしゃべっていいかよくわからない。なにしろ、親は自分より年輩だから……。



かぞえる

――初月給――

・たった半月でこんなにもらってよいかしら、責任を感じて恥ずかしい。
・思わず顔がほころび、自分ながらおかしくなってしまった。
・教生気分だったのが、プロ扱いされているんだなあと実感して、実力のなさをあらためて自覚した。
・自分の価値はこれだけかと思うと同時に、こんなにも価値があるのかと、複雑な気持ちになった。
・案外たくさん引かれていたのにびっくりした。
・仕事が忙しくて特別な感激を味わうゆとりがなかった。
・自分の無力、不安の方がまさって、うれしいとは思えなかった。
・金額に対して、仕分の仕事内容があまりに貧弱で恥ずかしい。
・こんなにいただいて申しわけない。
・アルバイトの報酬とは違う、ほんとうの労働の報酬であるとの実感をもった。
・やっと一人前の社会人になったと、感激した。
・仕事に対する責任が重くのしかかってきた。

つかう

――私の小遣い――

・家族のため（贈り物・学資援助・会食）
・生活費（家への食費・下宿代など）
・就職祝の返し。
・貯金（家の建築・マイカー資金）
・月賦返済（マイカー・洋服・本）
・交際費（歓送迎会など）
・交通費（定期券代・ガソリン代）
・学校で必要なもの（文房具・体操服・剣道の防具）
・趣味用品（カメラ・レコード）
・嗜好品（コーヒー・タバコ）
・遊ぶための金はほとんど使っていない。
・遠足の時に写真をとろうと、カメラを購入した。
・小遣い一万円、少ないが使う暇がない。
・朝七時から夜六時三十分までの勤めで指導に関する本が欲しいが、買いに行く時間が見出せない。

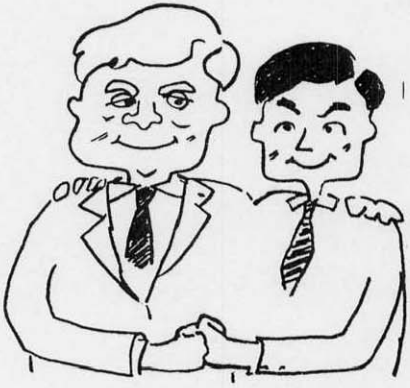
おもう

――今、考えること――

・子どもの心をつかみたい。
・生徒を叱るということは、ほんとうにむずかしいことだ。
・授業そのものに魅力がなければ、いくら子どもたちと遊んでも、子どもはついて来ない。
・学生時代は楽しかった。
・もう少し時間がほしい。
・子どものことがよくわからない。自分の教育の基準、根本は何だろうか。
・子どもたちが目を輝かせて「それからどうなるの？」と聞いてくれるような授業が早くできるようになりたい。
・子どもに、親に、同僚に信頼される教師になりたい。
・どうしたら授業中静かになってくれるだろうか。

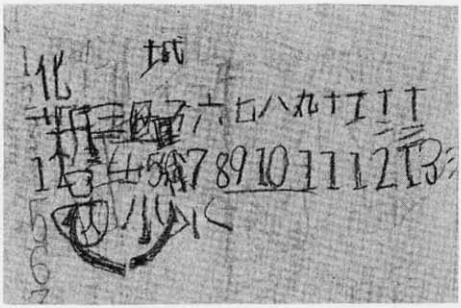
のぞむ

――先輩へ――



・抽象的な言葉の励ましだけでなく、具体的なアドバイスをしてほしい。
・もっと言いたいことを率直に言いあってほしい。
・細かな技術ばかりでなく、もっと基本的、理論的な面を話してほしい。
・時間にルーズな面があるので、会議などテキパキ進め能率的にやってほしい。
・親切に手伝ってくれることが、とてもうれしい。
・子どもひとりひとりを大切にし、努力をおしまない姿に尊敬の念がわく。
・先輩の先生方のはりきっておられる姿は、私にとって何にもかえがたい刺激となる。

教育日々



米づくり

常盤小　三上裕保

「おいしいね。」

「腹がいっぱいだあ。」

などと、満足そうなニコニコ顔。自分達で作った米でカレーライスを作り、お世話になった校長先生や教生の先生、地主さん、脱穀機を貸してもらったおばさん、籾すりをしてもらったN君のおかあさんなどを招待しての五年生最後の学級集会である。

理科の実習で収穫できた五升余の米をどうするかという問題の学級会から始まった。計画の話し合い、係分担をして、招待状を出す係、進行係、会場係等々、学級全員で協力して今日に至った。子どもたちそれぞれ全力を尽してきた満足感がただよっており、どの子の目も輝いている。

それにしても、理科の「稲の観察」から始まったこの学習。籾の選別。小さなポリ容器の中へ籾をまき、芽が出てきた時の喜び。「この苗で田植えがしたいなあ。」などという声が出てきた。それを耳にした校長先生が近くの家から田を借りて下さった。子どもたちの中から「ワーッ。」という大歓声。農業経験のある子は、わずか三人。ものめずらしさもあって、みんな大喜び。

いよいよ田植え。「田んぼに入るの気持ちがわるいね。」「指をそろえて植えるのかなあ。」「曲ってしまうよ。」など声が絶えない。子どもたちの服はどろだらけである。

「田の草取り暑いなあ。」「株が増えたぞ。」「花が咲いたわ。」

子ども達の目が光っている。

学習がとかく観念的になりやすいと言われる。図やグラフなどの資料だけで学習していても、生きた学習となってこないし、確かな学習とは言えないと思う。

近年、「勤労にかかわる体験学習」の重視が言われる中で、この「米づくり」の学習を通して得た集会までの子ども達の活動は、生き生きとしたものであり、感謝や協力など多くのものを学び取ったのではないかとつくづく思うのである。

M児と歩いた二年間

連尺小　西崎久代

M児の対人関係はほとんど見られない。けれど教師にすがりつくときの喜びはなんとも言えない表情である。廊下や教室の中では突然ひっくり返っては奇声を出す、ノートはかじってしまう。家庭ではどのような遊びを、どんな会話をしているか理解するためだとしてノートを通して対話を続けた。親の協力、関心を高めるにはすばらしい効果があった。ときには涙ながらに反発する文面にはっとさせられ、教師としても涙が流れ思いきり書き返す日もあった。

M児は二年生になっても集団の中で学習することができなかった。集団で生活する楽しさを味あわせたいとできるだけM児に話しかけるようにし、特に放課時、給食後の時間など担任も友達もつとめて声をかけ、一緒に遊ぶ機会をたくさん作った。

もう一つの試みとして絵日記を書かせることにした。これは心の扉を開き、みんなとのつながりを深める方法として行った。

その結果、担任とM児、M児と学校の子どもと対話がひろがり「Mちゃんこんなことを考えてるんだねえ」とわかってもらえるようになった。母親も「こんなに書けるようになって」と喜んだ。

子どもたち同志の対話の中から、よい表現、ひかったことばを見つけてはそれを伸ばそうと現在もはげまし続けている。

書くことによって対話が生まれ友達を認め交流しあえるようになった。三年生の九月には児童体験発表「ポチといっしょに体力づくり」と題して堂々と発表し皆の涙をさそった。私は日記指導を通してこの子たちの持つ美しさ、生きていこうとするたくましさを見つけだした。

周囲の人と視線があわず対話のできなかったM児が日記をなかだちとして友達を知り、遊べるようになった。四年生になった現在も書きつづけている。

写真・ことばのないM児、見てきたこと、すべてが絵になり、一枚の画用紙にせましと書く。

大山文庫の創設

五月二日、心筋硬塞で亡くなられた細川小学校教頭大山康夫先生のご遺族から「市の特殊教育の振興のために役立ててください。」と贈られた七十万円をもとに、市内にある特殊学級に「大山文庫」が創設された。

大山康夫先生は、教員生活二十四年余で、その後半は、市の特殊教育の発展に力を注がれた。

市の現職教育委員会特殊教育部の主任を経て、昭和四十八年四月から、特殊教育指導員となり、市内各校を指導して回られ特殊教育発展のための推進者として活躍された。

故大山康夫先生

その、大山先生のご遺志を生かすとともに、偉業を讃え、業績を永く残すために「大山文庫」が、市内にある三十九の特殊学級に創設された。

■多年勤続表彰の先生方

市内の学校に多年勤続（25年以上）の教育職員として七月一日の市制記念日に表彰を受ける方は次のとおり。

【小学校】 ▽井田＝岩月貞夫 ▽広幡＝荻野富義 ▽竜美丘＝鈴木依治 ▽矢作北＝加藤鉦司 ▽福岡＝近藤 薫 ▽山中＝土岐久夫 ▽矢作東＝青山士司 ▽広幡＝永田哲治 ▽藤川＝三貝皇 ▽恵田＝杉浦伊左夫 ▽根石＝江崎智枝 ▽男川＝中根麗子 ▽緑丘＝大山紀司 ▽羽根＝細井義雄 ▽広幡＝石川章三、杉山愿、黒柳律翁 ▽井田＝岩見孝喜 清水月子 ▽愛宕＝小幡まさ ▽岩津＝神谷知三雄、▽大樹寺＝高木末夫 ▽矢作南＝山本梅野、▽六ッ美南＝岡田宏

【中学校】 ▽矢作＝長島利一 ▽河合＝犬塚藤保 ▽竜海＝大河原隆 ▽福岡＝太田満也 ▽六ッ美＝柴田宗一 ▽城北＝川合博 ▽岩津＝高見和仁 ▽六ッ美＝岩瀬教 ▽甲山＝古井正晃 ▽東海＝山口けい子 ▽矢作＝五十川すみ子 （敬称略）

■奥殿小研究発表会

二十八日▼主題＝子どもの動きをかえよう（活動力あふれる学級づくり）▼内容＝おくとの集会、公開授業、研究発表、パネルディスカッション。

【寄贈刊行物・資料等】

◇昭和五十一年度**岩中だより**　岩津中学校編

年間10号の岩中新聞の総集編

◇**本を読んで**―読書感想文―第四号―　矢作西小学校編

低・中・高学年の三分冊

◇**でむしの記**―第2集―

「活動力のあるからだつくりをめざして」　岩津小学校編

保健体育優良校全国表彰受賞の教師の実践と子どもたちの喜びの記録

◇**職員連絡**　六名小学校編

長浜宏雄教諭が教務主任として、職員に配布した記録集

「岡崎の教育」を体験して

長期県外研修員の感想

五月二十三日から二十八日の一週間、千葉県柏市から長期県外研修員として六名の教務主任の先生方が、井田小学校・竜美丘小学校、竜海中学校にそれぞれ二名ずつ配属され研修された。

その先生方から、岡崎の教育についての率直な感想を伺ってみた。

○緑化日本一の緑の環境の中に教師の手に成る教育的意図と配慮されたすばらしい環境が構成されている。

○率先垂範の校長を中心として意欲に満ちた学校経営がなされている。

○地域社会と学校経営がうまく嚙み合っていて、学校が地域社会をよく啓蒙している。

○管理役職者が職員、児童に対し、親しみを持っている。また教職員も力量がある者が多い。

○教師が体験を通した授業をしており、時間の使い方も上手である。勤務時間にこだわらず研修に積極的である。

○隅々まで整備が行き届いており、清掃、靴の脱ぎ方、廊下の歩き方などの躾が身についている。一方、きびきびとしていて、よく鍛えられている

こうしたことから、教師の指導の積み重ねや学校の伝統がよくうかがえる。

岡崎の教師に望みたいこと

○喜びを喜びとして表現する態度に欠ける恨みはないだろうか。

○ユーモアを身につけ、人を楽しませる身のこなしに欠けてはいないだろうか。

岡崎の教師は、時間に全くこだわらずに「この道一筋」の感が深い。

唐弓弦（とうゆみつる）

私の家は代々『つる屋』といわれましてな。表の看板にありますとおり、唐弓弦を商っておりました。何でも今から五代ほど前から、この商いを始めたと聞いております。

唐弓弦といいますのは、綿の木からとれた綿を弾いて木綿糸を作る時使った弓弦のことで、大阪から仕入れて来ましてな、岡崎から西尾方面にかけて商っておりました。弓弦は、何か動物の毛をよって固めたようなもので、普通の弓弦とあまり変っておりません。大阪から仕入れのついでに、五香丸という丸薬を扱ったこともありました。

仕入れた唐弓弦は、表の十二畳の間に置いた一間幅の戸棚に並べて売っておりました。私ももう八十四才になりますが、十二、三才の頃、つまり明治三十七、八年くらいまではこの唐弓弦が売れたようでございます。

岡崎市材木町　森　権次郎氏談

●カット、イラスト　岩津中　山口明宏

オアシス

おとことおんなの差がなくなってきている。外見も中味も。

季節感が忘れ去られようとしている。雪を見ながらスイカもかじれる時代。ローカルカラーが消えつつある。日本中、どこへ行っても同じような衣食住。

これ、喜ぶべきか悲しむべきか。面白うてやがて悲しき鵜舟かな　芭蕉

しゅん（旬）、今では忘れられそうな言葉の一つ。野菜はビニールハウスで、魚は冷凍でといった時代になった。

広辞苑では「魚介・蔬菜・果物などがよく熟して味の最もよい時」とある。

いさきは脂がのっておいしくなり、煮付けや刺身、照焼に。酒好家には、鮑の酢物、きすの塩焼、新茄子の春雨揚げ。

雨が続くと気分までが湿りがちである。そんな時、一日でもカラリと晴れあがると、ふとんを干すやら、傘を広げるやら、まさに貴重な一日となる。「つゆばれ」とはこんな日を呼ぶことばだと心得て、ふと辞書を見たら、なんと「つゆばれ」とは、梅雨が終ったあとの晴天、つまり「つゆあけ」のことだとある。

「好き、嫌い、好き。」「わあー、うれしい！」と、子どもたちが花占いに興じている。今は白い花の季節だ。当てにはならないと思いつつも、マーガレットの花びらを散らした頃がなつかしい。

コンビの彼女はまだそんな年頃なのに背伸びしながらがんばっている。そんな彼女が大きくみえる。がんばろう！私も。

この本を

○続深代惇郎の天声人語	深代　惇郎	
朝日新聞社		¥ 980
○正義の時代	渡部　昇一	
文芸春秋		¥1,000
○「遊び」の文化人類学	青柳まちこ	
講談社現代新書		¥ 390
○世界史のなかの明治維新	芝原　拓自	
岩波新書		¥ 280
○みみずく通信	扇谷　正造	
ＰＨＰ研究所		¥ 980
○花守の記	水上　勉	
毎日新聞社		¥ 840
○車椅子・残酷な青春	ありのまま舎編	
エール出版社		¥ 800
○黄昏のロンドンから	木村　治美	
ＰＨＰ研究所		¥ 880
○お母さんは不思議な力がある	上坂　冬子	
青春出版社		¥ 890
○具体的な授業とは	愛教大附属岡崎小学校	
黎明書房		¥1,800